

◇ 6月の天文暦 ◇

日 時	記 事
1 10	上 弦
2 23	月 最遠
6 17	芒 種 (太陽黄経 75°)
8 2	木星 月の 4°N 通過
9 9	望
13 22	火星 月の 4°S 通過
16 10	下 弦
17 19	月 最近
18 18	天王 星留
21 19	水星 外合
22 10	夏至 (太陽黄経 90°)
23 7	朔
30 18	月 最遠

R. ウィルト

筆者が初めてエール大学天文台を訪れたのは、1959年夏で、そのときウィルト教授にお目にかかったときの印象は謹厳な英国紳士風のドイツ紳士というところであった。この前半の形容句は、その後ケンブリッジ大学のR. A. リトルトン教授にお目にかかったときの印象がよく似ていたところから付け加わる。当時お年は50歳ぐらいとお見かけしたが独身で悠々自適の研究生生活を楽しんでいる風であった。筆者の専門が異なるため親しくお近づきいただく機会もなかったが、1963年に再度エール天文台を訪れたときはウィルト教授の最近の結婚がほのぼのとした話題となっていた。

ウィルト教授の論文の数は、次号で紹介されるパービッジ夫妻の驚異的な数と、天体物理学の最先端をあますところなく論じてゆく絢爛華麗さにくらべると寡作家といえよう。にもかかわらずその名前が記憶されるのは、1938年に“水素の負イオン”というアイデアによって、恒星大気の問題を一挙に解決したからである。

星の大気で連続光の吸収が何によって生じるかということは、星のスペクトルを解釈するのに一番大切なことである。温度の高い星では中性水素ガスが励起されて吸収源になることが1920年代に分った。しかし、太陽を含めて温度の低い星では中性水素は大部分基底状態にあり吸収源にはなりえない。4月号で紹介されたウンゼルト教授はバルマー・ジャンプの見え方から、太陽では水素と金属の存在量比が50:1位ではないかとも考えた。しかし金属を連続光の吸収源にしても、観測される連続スペクトルの形を説明できなかった。当時、量子力学的考察によってのみその存在が知られていた水素の負イオンを導入したのがウィルト教授であった。(実験室で吸収能が正確に測定できるようになったのは1950年代も終である。)負イオン数は、中性水素の数に比べると問題にならないくらい少ないが、それでも励起状態にある中性水素の数よりずっと多いのである。この研究によってウィルト教授は1966年にエディントンメダルを受けられた。

教授はまた若い頃から惑星の大気や内部構造に興味と関心を持ちつづけておられる。Journal of Atmospheric Science (Vol. 26, p. 795, 1969) にのっている短篇は外惑星大気研究の初期の歴史をふりかえられたもので面白い。

生国ドイツ、1935年にウィルソン山天文台研究員となり、以後米国に永住。現エール大学天文台教授。(堀源一郎)

